

多言語読み聞かせ

- 多言語読み聞かせを通じた多文化理解の促進と実践方法の確立 -

大島 汐音

(学籍番号: 22PE1013, 指導教員: 渋谷恵教授, 共同研究: 比較国際教育ゼミ 4年生一同)

意義

多言語読み聞かせとは、ある一冊の絵本を見開き 1 ページごとに外国語と日本語で交互に読み進めていく、読み聞かせ方法の 1 つである。多言語読み聞かせの意義は以下の 3 つがあげられる。

- ① 日本語を母語とする人が様々な国の言語に触れる機会を作ることを通して、多文化理解・多文化共生の意識を広げること。
- ② 多くの外国につながりのある人々が日本語やそれ以外の言語に触れる機会を増やし、日本語学習への興味の促進や子どもの異文化理解教育への参加などの動機づけにつなげること。
- ③ 外国につながりのある人々が母語を活用・紹介する機会を作ることを通して、母語の運用能力の維持を図ると共に母語を誇りに思う気持ちを芽生えさせることができるようにすること。

背景

教育発達学科比較国際教育ゼミ 4 年生は 3 年次の「教育発達学演習 A・B」の講義の中でフィールドワークを実施し、東京都新宿区大久保にある大久保図書館に足を運んだ。大久保図書館はコリアンタウンの中心に位置することから、外国とつながりのある人々が多く利用する施設である。そのため、この施設では単に本の貸し借りを行う図書館としての役割にとどまらず、地域住民のニーズに合わせて韓国語・中国語・英語・やさしい日本語のパンフレットを用意し、日本で生活していく上で必要な生活に関わる情報や、お金に関する情報、各種申請に関する情報を発信するという役割も担っている。こうした役割を担うこの施設で月に 1 回行われる、「外国語のおはなし会」では、外国につながりのある地域の方々のボランティアによって外国語と日本語を交互に読む多言語読み聞かせが実施されていた。この活動に感銘を受け、私たちもオリジナルの多言語読み聞かせを企画・実践し、多言語読み聞かせの普及及びその実践方法の確立について考察したいと考えた。

目的

多言語読み聞かせを外国とつながりのある子どもに行う目的は以下の 2 点である。

- ・多言語読み聞かせの実践の一助となることで、多言語読み聞かせを広めるきっかけを作ること
- ・多言語での絵本の読み聞かせを実施する人々に向けた効果的な実施方法を検討すること

方法

研究 (調査・実験) 対象者は、教育発達学科に所属する学生及び外国につながりのある子どもを想定している。教育発達学科に所属する学生は、教員を志す学生が多いことや、全員が教育発達学方法論 (体験活動) を履修し、小学校の現場にいる児童の様子についての知見があるため、多言語読み聞かせの有用性や実用性についての議論を得ることができると考えた。また、外国につながりのある子どもに多言語読み聞かせを実践することで先に挙げた多言語読み聞かせの 3 つの意義を実践し、多言語での絵本の読み聞かせを実施する人々に向けた効果的な実施方法を検討することに繋げることができると考える。

以上の対象者に向けて以下の 2 カ所で多言語読み聞かせを実施した。

- ① 明治学院大学白金キャンパス

対象: 教育発達学科に所属する学生

絵本: しんごうきピコリ

言語: 日本語・英語・中国語

目的: 多言語読み聞かせの普及、現場レベルの視点からの有用性・実用性に関する議論



- ② 新宿区立大久保図書館

対象: 外国に繋がりのある子ども向け

絵本: やさいさん

言語: 日本語・韓国語

目的: 多言語読み聞かせの意義の実践及び多言語での絵本の読み聞かせを実施する人々に向けた効果的な実施方法の検討。

手続き

多言語読み聞かせは以下の手順を追って行う。

① 対象児童に合わせて絵本を選ぶ

この時、児童は日本語を母国語としていないことを前提として捉え、集中力が切れないよう最後まで楽しむことができるような絵本を選ぶことが大切である。

② ニーズに合わせた使用言語の選択

実施場所に合わせて外国につながりのある児童の実態を調査し、ニーズのある言語を選ぶ。

③ 絵本の翻訳及び読み聞かせの練習

翻訳には、Google 翻訳や ChatGPT などを適切に活用する。発音やイントネーションは Google 翻訳の読み上げ機能を活用して練習した。

④ 実践

対象者の様子や反応を注意深く観察しながら実施する。

結果



Picture 1 明治学院大学白金キャンパス



Picture 2 新宿区立大久保図書館

Picture1 の明治学院大学白金キャンパスで実施した多言語読み聞かせの参加者は教育発達学科 3 年生の 10 名。多言語読み聞かせについて知つもらう事が第一の目的であったことから、絵本の中盤までを中国語×日本語で実施し、後半を英語×日本語で実施した。実施後のアンケートの結果からは、「異文化に興味を惹くきっかけになると感じた。多言語と内容も相まって多様性の重要性や視野を広げるきっかけとなる活動だと感じた。」や、「それぞれのバックグラウンドを持つ子どもたちの相互理解等につながると思う。」という意見が聞かれ、肯定的な意見が多く、小学校の

外国語活動の時間などでも活用できるのではないかというより実用性の高い場面についての意見も得ることができた。

Picture2 の新宿区立大久保図書館で実施した多言語読み聞かせの参加者は 6 名。外国につながりのある子どもも向けを想定していたが、当日参加してくださったのは母国語を日本語とする日本人の方のみであった。実施後のアンケートからは、多言語読み聞かせを通して、幼い頃から違う国の言葉に触れることは、異文化理解においてどのような効果があるかについて、「そもそも母国語以外に触る機会に乏しいと思うので、「外国」という概念が身近に感じられ、効果があるようと思われる」という肯定的な意見がある一方で、「言葉に触れるだけでは異文化理解につながるとは思わない」という意見も見られた。

考察

今回、2 回の多言語読み聞かせの実施を通して、多言語読み聞かせの活用方法として、小学校の外国語の授業の一環として取り入れることが切るのではないかという気付きを得たと共に、日本語を母語とする子どもや保護者の方々が多言語による読み聞かせの参加を通じて、外国語の言語をより知ろうという積極性や前向きな行動を生むきっかけづくりになったと考える。

しかし、今回は外国にルーツがある方は一人も参加しなかったため、外国人移住者の日本語学習への興味の促進や異文化理解にはどれほどの効果が考えられるかは検討できなかった。また、母国語と異なる音の響きを味わい、「いつもと違う」事に出会うことを通して異文化理解を図るという意図があったため、「言葉に触れるだけでは異文化理解につながるとは思わない」という意見については、言葉以外にも絵本の内容を日本文化に関わる物にする、読み聞かせ後に関連する活動を加えるなど工夫することでより深い異文化理解に繋がるのではないかと考える。

主要引用文献

江口典子・許夏玲 (2022) 日本語支援教室での保護者支援と多言語読み聞かせの活動の可能性. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 73, 655–665.

付記

本研究は著者が所属する比較国際教育ゼミの 4 年生による共同研究として行われた。